

1 分布図の教材研究

前回、分布図の読み取りのための一般的な視点として、次の4点を示した。

- ① 基本的な項目の確認
- ② 情報を整理する活動の組み入れ
- ③ 分布の要因の追究と新たな理解
- ④ 地理的な知識の積み重ねが前提

これらは、学習者への発話を考えるための視点であるが、教師自身の教材研究のための視点にもなる。

右図の「日本の工業のさかんな地域」を例にして、教材研究の具体を示す。

まずは、基本的な項目として題や記号等の説明を確認する。題は「日本の工業のさかんな地域」とある。そのまま読み過ぎそうな題であるが、学習者によっては、「地図に示されていない地域や都市は工業がさかんではない」と読み取る可能性がある。「日本において工業生産額が多い工業地域や都市が示されている分布図」であることをおさえる。

次に、オレンジ色で示されている「工業のさかんな地域」と赤丸で示されている「その他の主な工業都市」の傾向性を見るために、教師自身も一度情報を整理する活動に取り組む。「工業がさかんな地域は太平洋ベルトに集中している」「工業地帯は海の近くに立地している」といった知識が教師にはあるので、その視点で工業のさかんな地域をまずは確認していく。続いて、学習者の視点で細かく分布図を見ていく。いくつかの気になる点が次のように出てくる。

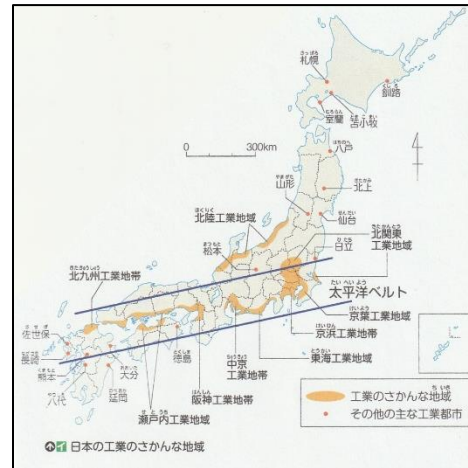


図1 「日本の工業のさかんな地域」
（『小学社会 5 上』教育出版） p.144

- ・京浜工業地帯の北側の北関東工業地域は海沿いではなく内陸部に位置している
- ・太平洋ベルトの枠内にある阪神工業地帯から西側の工業地域は、太平洋以外の海に面している
- ・「地域」と「地帯」の違いは何か（教科書に「キーワード」として違いが掲載されている）
- ・「京浜」「京葉」「阪神」の名称の由来に学習者は興味を示すのではないか
- ・学習者は、東西に長く続く瀬戸内工業地域と北陸工業地域に注目しそうだが、生産額はどれくらいか

上記の内容は、この分布図を深く理解する内容なので、教師自ら事前に調べたい。その結果、教師自身の知識を増やすことになる。たとえば、瀬戸内工業地域の工業生産額を調べてみると、近年では阪神工業地帯のそれに迫っていることがわかる。教科書にも「かつての四大工業地帯地

帯を生産額で上回る工業地域も出てきました」と書かれていることに、工業生産の変化を改めて理解する教師もいるであろう。

続いて赤丸の「その他の主な工業都市」を確認していく。情報を整理する活動として、示されている都市についてその傾向に留意して見ていく。以下のようなことに気づく。

- ・ 17都市が示されているが、「工業がさかんな地域・地帯」の都市は省略されている。「その他の」という部分をきちんとおさえておく必要がある。
- ・ 17都市の多くが海沿いに面しているに学習者は気づくだろう。内陸の地域にあるのは北上、山形、松本である。教科書本文に「ICなどの小さな部品を作る工場は、海からはなれた内陸の地域にも広がっています」と書かれており、これらの都市と本文を関連づける必要がある。
- ・ オレンジ色の「工業のさかんな地域」には北海道地方と東北地方が示されていないが、「その他の主な工業都市」には両地方で8都市が示されている。また、九州地方も6都市が示されている。ここには資料作成者の意図が反映されている。

気になったものは、先と同様に教師自身の教材研究として調べてみる。IC工場の立地に適した条件（交通、環境、労働力）を調べてみると、教科書に示されている北上、山形、松本は確かにその条件に合っていることがわかる。この教材研究が発話のヒントにつながっていく。

2 具体的な発話

分布図の教材研究を終えたら、その成果をもとに発話を考える。以下、実際の発話について1で示した視点をもとに記す。

① 基本的な項目の確認

まずは題の確認をする。「工業のさかんな地域」とは、ここでは「工業生産額が多い地域」と伝え、先の分布図の左側にある「工業の盛んな地域の工業生産額」の帯グラフとの関連を示唆する。

次にオレンジ色と赤丸がそれぞれ「工業のさかんな地域」「その他の主な工業都市」を表していることを確認する。また、それらには地域・地帯名、都市名が書かれていることも教える。このことは、教師からすれば自明のことであるが、学習者によっては意識できない場合もある。試しに自分たちが住む都道府県（あるいは地方）の一つを「仙台を指で押さえなさい。」と確認する。「このように都市名や地域名が書いています。」と話すことで、この図の見方の一つを学ぶことになる。

② 情報を整理する活動の組み入れ

今回の分布図は分布の傾向がわかりやすいので、見方に慣れている学級であればすぐに「気づいたことや思ったことをノートに書きなさい。」と指示してよい。ただ、最初から立地状況に焦点化したい場合には「工業がさかんな地域はどこに立地しているか。」と発問してもよいであろう。

分布図の見方が不十分なのであれば、情報を整理する活動を組み入れたい。たとえば、「工業のさかんな地域を東から順番に丸で囲みなさい。」と指示する。結果的にオレンジ色を大きくマーキングする

だけなのだが、学習者が一つ一つの地域を確認することつながる。その中で、「京浜工業地帯は、京浜工業地域・北関東工業地域と続いている。」「瀬戸内工業地域は瀬戸内海の北と南の両方にある。」といったことに気づいていく。同様に「その他の主な工業都市」も丸で囲む活動をさせる。多くは海沿いに位置づいていることを学習者は理解するが、一部内陸部にも位置している都市があることにも気づいていく。このような場合でも、気づいた情報をノートに記し、発表に備えるようにする。

一定時間の活動後、学習者に気づきを発表させる。一通り発表を終えたら、「工業のさかんな地域や都市はどこにあるといえるか。」と地理的な見方につながる発問を行う。気づきが少ない場合には、「海の近くか、山の近くか。」「日本海側か。太平洋側か。」といった答えやすい補助発問を準備しておく。「海の近くに工業のさかんな地域・地帯が広がっている。特に太平洋と瀬戸内海が多い。」「工業のさかんな都市も海の近くが多いが、一部内陸にもある。」という分布図の傾向をおさえる。

また、この際、分布図の隣に示されている「工業の盛んな地域の工業生産額」の帯グラフから、主な工業地域・工業地帯の工業生産額と盛んな工業の種類の傾向も分布図と関連づけながらおさえておく。

③ 分布の要因の追究と新たな理解

続いて、「なぜ、海の近くに工業のさかんな地域・地帯が多いのか。」というように、先の分布の要因について考えさせる。本時のねらいに結びつく重要な発問である。これについては、教科書の該当ページに答えやヒントとなる情報は書かれていない。どのようにしたらよいか。

「原料の輸入」「製品の出荷」「労働力」「消費地」「交通網」等の既習内容が身につけているのであれば（冒頭に示した④「地理的な知識の積み重ね」に該当する）、調べ活動を含んだ話し合い活動が効果的である。既習の資料や、地図帳や資料集にある関連資料をもとに活発な意見交流がされるであろう。

学習者の状況から、そのような活動が難しいという場合には、「海に面して都合のよいことは何か。」「どのような交通手段が考えられるか。」「その根拠はどこに書かれているか。」「他の理由はないか。」といった補助発問でねらいに迫っていく。

その後、「その他の主な工業都市」で内陸部に位置する北上、山形、松本の各市を示し、「これらの都市は海の近くに位置していないのに、なぜ工業が盛んなのか。」と学習者をゆさぶる。教師の教材研究の成果である I C 工場の立地に適した条件（交通、環境、労働力）の資料から考えさせ、海の近くの工業がさかんな地域との共通点、相違点をまとめていく。

これらの学習のプロセスで、工業のさかんな地域の要因は単一のものではないことを、学習者は地理的な考え方の一つとして学ぶ。それは学習者の新たな理解になっていくのである。

※参考文献

- ・井田仁康(2019)「見方・考え方を働かせて学ぶ！地理授業デザイン スケールの重要性「位置・分布」を働かせて」『社会科教育』2019年6月号（明治図書）
- ・吉田和義(2015)「地理から日本の「今」が見えてくる◆子どもの興味と視点を広げる地理ネタ+授業化ヒント 工業生産 分布図から工業の特色を読む」『社会科教育』2015年10月号（明治図書）